

ある学生の飛び立ちに、嬉しくもあり、寂しくもあり

学部、修士課程、博士課程と足かけ8年、ひたすら真摯に重症児に係わり合い続けてくれた学生が4月からある国立大学の教壇に立つので、離仙の挨拶にわざわざ来宅してくれた。

彼は「講演等を聞きたいから」と、自分の講演依頼にも運転手がてら遠くは埼玉まで同行してくれたことも。

また、各研修会、研究会、ゼミ等と一緒に参加するために、送迎の労をかって出たことは、数しれず。

学ぼうとする彼がいたからこそ、リタイヤ後も引きずられて各種の研修会等へも顔を出したのかも…。

こうした間柄だっただけに、彼が飛び立つのは、嬉しくもあり、一抹の寂しさもあり…。

思えば現職時代に、重症児との係わり合いを通して、課題研究、卒業論文、修士論文に取り組む多くの学生（35年間に33論文）と出会ったが、彼は自分には最後の、また、最も長期間係わった学生であり、国立大学の教壇に立つ（「雑学BN」の「随想等関係（I）」P、2002.12.30.「元学生には、煩い存在かな？」：参照）6人目の元学生ということにもなる。

さあ4月からは、今度は彼がどう学生を育ててくれるのか、楽しみである。

思い返せば、各大学の教官から、課題として重症児と係わりたい希望の学生を紹介された時、自分は一つの条件：「継続的に係わり合うこと」だけは譲らなかった。

つまり、障害児と継続的に中で、係わり合うということはどういうことかを、学生自身が苦悩し、思考し、学生自身の内面で学んで欲しかったから…。

それだけに、苦悩から途中で自信をなくし、課題から逃げようとする学生も数多くいた。

そうした学生には、「君や我々は、辛さから逃げ出すことが出来る。だが、障害児は、自らの障害故の辛さから一生逃げ出せない。それを気づき、思考しないなら、障害児と係わる意味がないから、明日から来なくてもいいよ！」と話した。

学生たちは、自らの辛さに向き合い、障害児に限らず、「人と人が係わり合うとはどういうことか」という教育活動の、また、人間関係（コミュニケーション）の本質を思考し続けてくれた。

自分は、「内面に問いかけて悩ませ、思考のヒントを示唆するだけ」であったが、学生は、自らの力で、自らの問いに答えようとする頼もしい存在である。

前向きな多くの学生と、この歳まで出会い続けることができたことを、心から感謝している。

（2006年3月25日 記）